

神田秘帖

「14. 日本透析医会の黎明期を彩った人々—1」—— 山崎親雄

平成 26 年に、当時の事務局長から、主として日本透析医会（医会）の法人化以前の資料を整理するよう依頼され、段ボール 10 個ほどの資料が届きました。最初の資料は、昭和 53 年の診療報酬改定による透析医療費の大幅な引き下げを受け、名古屋の太田和宏先生が主として全国の民間透析施設へ呼びかけ、次回診療報酬改定対応を行うための組織の立ち上げに関するものでした。

その後も、主としてこの資料を基に神田秘帖を書いて参りましたが、5 年越しに資料の整理が終わりました。最終的には、段ボール 1 杯分を残し、残りは全て廃棄処分とすることにしました。

ということで、古い資料を用いた神田秘帖も、日本透析医会雑誌今年度第 3 号で終わりにします。最後の 2 回は、寂しいことですが多くの方の追悼を兼ねて、日本透析医会の黎明期に関与された方々について書こうと思います。

まずは法人化直前の、幻の日本腎不全対策協会（神田秘帖 5）の理事の方々です。医会の理事は当時から、専務理事・常務理事以外に、地域から推薦される理事と、会長が推薦する理事がありました。ここでは後者の理事について。

飯田喜俊先生：山川眞常務理事の推薦だったでしょうか。透析というよりも腎生理学を専門とする臨床家であり、現日本透析医会会長の秋澤忠男先生との共著『臨床透析ハンドブック』は第 4 版まで重ねられました。医会の中でも多くの学術的な功績を残され、現在の日本透析医会雑誌の体裁および内容は、飯田先生が広報委員長を担当されておられた時からのものです。

太田和夫先生：個人的には、わが国の透析を牽引した 3 人のうちの 1 人と評価しております。わが国初の生体腎移植を実施した外科医で、後に日本透析医学会および日本腎移植学会の理事長も務められました。それにもまして、多くの先生が東京女子医大腎センターで研修されたことこそ大いに評価されるべきです。講演は全国に及びましたが、講演の行き帰りの列車で、原稿を一本書き上げるという筆の速さは有名でした。

翁久次郎先生：知る人ぞ知る富山県に多い姓です。厚生事務次官を経験し、大平内閣時代は内閣官房副長官でした。もちろん、医会が法人化する際のキーマンで、この方が理事に就任した時点で、医会の法人化は大きく前進したと思われまふ。厚生省の推薦だったでしょうか。

小高通夫先生：いろいろな評価のある先生ですが、個人的には小高先生こそが、わが国透析医療の礎を築

いたと思っています。なかでも、わが国が世界に誇る統計調査は、ほぼ1人で完成させ、継続されてきました。後日、その統計調査をもとにした発言で、透析の表舞台から退くことになったのは、なんとも皮肉なことでした。医会が組織される前の、透析診療報酬に関する厚生省への要望と情報提供は、日本透析医学会の代表者として小高先生がやっておられました。医会の事業や医学会との関連から、必ず理事に入ってほしい先生だったと推測します。

小出桂三先生：帝京大学市原病院に勤務されておられ、常務理事の鈴木満先生（東葛クリニック・千葉県）の推薦で理事に就任されたと思われます。著書として共同編集の『慢性腎不全の薬物療法』や、監訳された『レジデントのための腎臓病学』などがあり、医会の中の学術部門を担当されていました。

杉野信博先生：「早すぎる透析導入」が問題となった時点での日本透析医学会理事長でした。直後に医会では、適切な透析導入に関するシンポジウムを開催し、同時に杉野先生にお願いし、「透析導入基準」を作成、提案していただきました。その後この基準が改変され、この時一緒に検討していただいた川口良人先生を班長とする厚生科学研究の成果として報告され、今なお用いられています。最後まで、医会雑誌に、絵手紙のような随筆を書いていられました。

園田孝夫先生：当時の日本移植学会理事長です。日本腎不全対策協会の事業は、腎疾患の予防治療から、腎不全保存療法・透析医療・移植医療まで幅広いものを考えていましたから、移植医療支援のためにも、理事に就任いただいたものと思われます。

矢野亨先生：日本医師会常任理事。厚生省が示した医会法人化のための3条件の一つに、医師会の承認があげられていました。そこで、医会の事業を十分承知したうえで医師会の推薦をと考え、理事に就任していただいたと推測します。

田村武敏先生：日本透析医会顧問弁護士として、法人化へ向けた定款整備などを担当されました。事務所が虎ノ門にあったことと、富山県出身ということから、先述した翁先生とのご親交があったかとも推測されます。医会雑誌 Vol.2 (No.3) の巻頭論文で、日本透析医会初代会長の稲生綱政先生が「日本透析医会回顧録—私の日記から—」の中に、田村先生の役割を書いておられます。

三村信英先生：虎の門病院副院長のあと、腎疾患のナショナルセンターとなった国立佐倉病院の院長に転身され、腎不全対策協会の理事就任はこの時のものです。腎不全治療の中でも、特に腹膜透析治療の発展に寄与されました。

成田真康先生：当時、愛知県透析医会の会長で、愛知県腎不全対策協議会の副会長でした。専務理事の太田裕祥先生の推薦があったと考えています。

以上、いわゆる独断と偏見に満ち溢れた理事紹介となりましたが、ご勘弁のほど。

さて今回は、予告通り神田秘帖最終回となります。

日本透析医会名誉会長/増子クリニック 昴